# 異邦と楽園

策

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異邦と楽園

【Ｎコード】
Ｎ０５３７Ｅ

【作者名】
策

【あらすじ】
仕事も辞め、女性にもフラれた男が失意の中でダラダラと過ごしている内に、何故か異世界に。逃げ出した先に、果たして楽園はあるのか。恋あり、涙あり、笑いあり……なのか？基本的にノリと勢いで進む異世界奇譚。レッツ、エンジョイ＆エキサイティング。

# プロローグ

逃げ出した先に、楽園があるとは限らない。

そんな事は百も承知だ。

言われなくても分かっている。

逃げたからと言ってどうなるものでもないし、大抵の場合事態は好転しない。それでも、それでもだ。逃げなきゃやってられない時もある。これだけは誰だって同じなはずだ。

逃げる先は人によって様々。酒に逃げる人もいれば、ギャンブルに逃げる人もいる。薬物に逃げる人もいる。

俺は、酒は飲めないという事もないが、特に好きでもない。現状から逃げるために浴びる程飲もうにも、いくら飲んでも酔えない。いや、正確には酔ってしまう前に寝てしまうというのが正しい表現だろう。よって、酒は却下。飲んで飲まれて飲まれて飲んでな人がうらやましい。

ギャンブルは、言うまでもなく却下。理由は金だ。先立つ物がなければ、今の世の中遊べない。

お金がなくとも毎日を楽しめたあの頃の俺はどこへ行ったのか。当時の俺が、今の俺を見ればどう思うだろう。あの頃の俺は、きっと輝いていた。

……それはともかく、金が無い。三ヶ月以上勤めていれば失業保険でもあったのだろうが、一ヶ月ではなぁ……。

借金してまでギャンブルをしようとは思わない。これでは逃げる以前だ。

薬物は論外。ジャンキーにはなりたくない。鼻から紫の煙を出しながら宇宙と交信したくもない。

あるいは全てから逃げ出し、自宅に篭もって己という殻の中に閉じこもる人もいる。そんな状態のことを、世間では一般に引き篭もりだのニートだのと呼んでいる。

一部では自宅警備員等という呼称もあるが、あまり浸透はしていない。これらは残念な事に、あまり評判はよろしくない。

でも、そんな事言われても仕方ない場合だってある。孤独の中でしか癒やせない心は、確かに存在する。

当事者が言うんだから間違いない。そう、つまりは俺の事だ。日ノ本秋彦、二十二歳と三ヶ月。目下無職。一人暮らしの安アパートにて、日々をダラダラと無為に過ごし中。

失意というのは厄介な物で、意思の弱い人間は一度落ち込んでしまうと中々立ち直れない。

きっかけは、些細な事。人によっては些細な事だが、俺にとってはそれなりに重要な事。

簡単に言えば、職を失って女にフラれただけだ。

不幸のダブル役満みたいなこんな状況も、文にしてまとめてしまえばわずか一行。当たり前の事だが、コンパクトになってもお得感はあまり感じられない。

せっかく大学を出て就職した物の、まさか入って一ヶ月で辞めるとは自分でもびっくりです。つくづくそう思う。

何があったのかもう少し詳しく言えば、まず勤め先の同僚からミスをなすり付けられ、以前から反りの合わなかった上司に一方的に怒鳴られ、気が付けばその場を飛び出し、俺は勢いのままに会社に三行半を叩きつけていた。その後、好きだった女性からは逆に三行半を叩きつけられ、今に至る、と。

ごめんなさいと、申し訳なさそうに俺に言った彼女。今でもその時の事は鮮明に覚えている。覚えているというか、脳裏に焼き付いて離れないというか、そんな感じだ。

「あなたの事は嫌いじゃないけど、今は勉強に集中したいから誰とも付き合う気はないの」

俺はそう告げられた時、一体どんな顔をしていたのだろうか。笑っていたのか、それとも泣いていたのか、あるいは無表情だったのか。

ともかく、ここまで言われてしまってはもうどうしようもない。そうか、駄目なら仕方ないなと俺は潔く諦めた。

いい男は諦めが肝心。顔で笑って背中で泣くべし。フラれたわけじゃない、ちょっとFA宣言されただけさ。人的保障も金銭補償もないのが少々辛いとこだけども。そう思いつつ、俺は笑い顔を無理矢理に作りながら彼女の元を去った。

彼女と出会ったのは一年程前。大学の後輩だったのが縁で知り合った彼女は、誰にでも優しく、いつも笑顔。そんな女性だった。人は外見じゃなくて、内面が重要だと彼女はよく話していた。

荒んだ今の時代に、なんていい子なんだろう。そう信じ込んだ俺が惹かれたのも無理はない。

飲みに誘えば大抵は来てくれるし、よく話をした。そして彼女が時折向けてくる笑顔には俺に対する好意も多分に含まれていると解釈して勘違いしてしまい、結果的に見事に玉砕した訳だ。人は外見だけじゃないと言っていたんだし、きっと俺の事は外見じゃなくて、内面がお気に召さなかったのだろう。そんな風に自分を納得させていた。

ある日の事、俺は別の後輩――ここではA君としておこう――から世間話の中、こんな話を聞いた。

A君の知り合いが合コンに行った際、件の彼女も来ていたそうな。そして彼女は合コンで散々盛り上がって泥酔し、その帰り道に駅前で男にナンパされたのをきっかけにそいつと付き合う事になったそうな。

なるほど、と思った。勉強に集中したくて内面重視な人が、合コ

ン行ったりナンパされた男と付き合うなんてすごいや。合コンとかナンパって、明らかに相手の外見しか見ていないんじゃなかろうか。

結論。女なんてそんなもんだ。

そして元々仕事を失って落ち込んでいた俺は、この件をきっかけに更に鬱々とした気持ちを抱いたままアパートの自室に引き篭もる事となったのだった。

『職を失った事も、女にフラれた事も、今となってはいい思い出です』

そんな風にいつか笑顔で語れる日が来る事を切に望む。望んだ所で仕方ないだろうが、それでも一応望むだけ望んでおく。

付けっ放しのテレビをぼんやり眺め、それに飽きればＰＣを起動して特に目的もないネット検索。そんな毎日がここ最近の繰り返し。

空虚と言うよりも、指向性の持てない宙ぶらりんな感情がずっと心を支配している。そして今日も、失意の中時間だけが無常にも過ぎていく。今日も、恐らく明日も明後日も。

時間に意味などなく、好きな時に寝て好きな時に起きる生活。貯金を切り崩しながら、特に何かするでもなく漫然と日々を過ごして行く。

しばらくはこんな日が続くだろうと、そう思っていた。そのはずだった。

心のある場所に、自己が確立する。ならば、俺の心の置き場所はどこにあるのだろうか。少なくとも、この部屋にはない。かと言って、外に出てもきっと見つけられない。

心がないままだと、俺は俺である事に自身が持てない。心にぽっかりと空いた穴は、いつまでも閉じる気配はない。

だから俺は逃げた。なりふり構わず現実から逃げ出した。

逃げ出した先に、楽園があるとは限らない。

だが――。

# 第1話

カーテンと窓を閉め切った部屋で、昼夜逆転をした生活をしていると時間の感覚が希薄になってくる。

真っ当な社会生活をしていた頃と違い、時間という概念の意味がなくなるのだ。

昼夜逆転する事もあれば、逆に農家の人並に早寝早起きする事もある。

こんな生活を続けていると体内時計が狂うので、体に悪いと人は言う。大きなお世話だ放っておいてくれ、と俺は答える。

澱んだ空気を入れ替えるために、たまに窓を開けて外を覗くが、その時に茜色に染まった太陽を見ても、それが朝日なのか夕日なのか判断が付かない事もしばしばある。そういう時は、ＰＣのモニタに表示された時刻表示を見て時間を確認する。ネットを繋いで時刻サーバーと同期しているだけあって、昼なのか夜なのか一発で分かって大変便利だ。

部屋の中には壁掛け時計に目覚まし時計、果ては携帯まで様々な時間を確認する術があるが、すっかり無精者になってしまった俺にとってはＰＣを見た方が手っ取り早くて楽だった。

だから、その日起きた時も俺はいつもの癖でまずはＰＣを起動しようと思った。

寝惚け眼のまま、今日一日の予定を何となく考える。ま、何はともあれＰＣを付けてからだな。俺はそう結論付け、まずは起き上がってＰＣを乗せたデスクがある方へと向かおうとした。

――向かおうとしたんだ。

小鳥の囀りが聞こえる。普段ならノイズにしか聞こえないその声も、何故か今日に限っては特別嫌悪感もなく頭の奥へと浸透してい

く。
閉じた瞼の隙間からは柔らかな光が差し込む。そのまま目を閉じているのが、もどかしいような、何とも言えないくすぐったい感覚に俺はゆっくりと目を開けた。寝転がった仰向けの姿勢のまま、視線は真上に固定される。
木漏れ日からは淡い光が漏れ、辺りの木々には濃厚な緑が広がっている。
澄んだ空気。そして、むせ返るような、けれど不快ではない懐かしい匂い。いつか、ずっと昔、子供の頃の思い出と共に鼻腔をくすぐる匂い。
――これは、土の香りだ。
泥んこになるまで遊んだ昔の思い出が脳裏をよぎる。
俺は大きく鼻で深呼吸をして、その匂いを堪能した。

「あぁ、懐かしいなぁ」

心地良い日差しと、澄んだ空気に緑と土の香り。
都会というのもおこがましいが、日頃俺の住んでいる街では中々嗅げない香りだ。特に、部屋に篭もりっきりだった俺には。あの据えた臭いの俺の部屋とも、どこか錆びた感じのする街の臭いとも違う。正真正銘の、自然の香り。まるで夢の中のようだと思えた。
だが、まるで夢だと自分で考えるからには、俺はこれが夢ではないと認識をしているのだろう。俺は妄想や空想する事は好きだが、変なクスリには手を出してはいない。知らない内に幻覚効果のある食物を摂取した可能性もないとは言い切れないが、その確立は極端に低いだろう。
虚構と現実の区別はしっかりと付く。つまり……。

「なんじゃこりゃ」

唐突な現実に意識が追いつかない。
おかしい。何かがおかしい。というか、全てがおかしい。これは変だ。異常だ。異常事態発生だ。エマージェンシーってやつだ。って、英語で言っても意味は一緒か。

「いやいやいや。待て。まず状況を整理してみよう」

自分を落ち着かせるために、あえて独り言を言う。もちろん普段の俺はこんな風に一人でブツブツと喋ったりはしない。

「俺は確か、昨日はいつもと同じように明け方までネットして、夜食にカップ麺食って、それからそのまま自分の部屋で寝た。それは間違いない」

間違いないはずだが、どう見てもここは俺の部屋ではない。上半身だけ起こし、辺りを見回してみる。まず、目に付くのは溢れるように乱雑する大小の樹木。目の前には木。右を見ても左を見ても木。もちろん後ろを向いても木だ。

「……木しかないな」

壮大な緑が目に眩しかった。
森の中だろうか？　あぁ、大自然万歳。

「俺の部屋でないのは間違いないようだが……。ぶっちゃけ、ここは日本なのか？」

自慢ではないが俺の住んでいるアパートはそこそこの都市部にある。市内どころか郊外ですらこんな自然は中々お目にかかれる場所ではない。しかし日本だとすると……。

「まさか、富士の樹海？」

国内の森＝樹海という単純な式が瞬時に完成する。

探せば国内にも森は他にもあるだろうが、とにかくその時の俺はそう思った。何で樹海に俺が？　俺は部屋にいたはずなのに何故？

答えの出ない疑問が次々と浮かんできては消えていく。

そういえば、自衛隊って樹海で演習やったりするんだよな。森の中で重装備背負いながらの行軍。食料は蛇食ったり蝉食ったりの現地調達。自殺者の探索もするらしいし、自衛隊のみなさんも大変だ。

――それはともかく。

俺は脱線する思考を一先ず打ち切り、その場から立ち上がった。その際、シャツの背中とジーパンに付いた土と汚れを払う。服装は昨夜寝た時のままだ。服装だけは。

「あーあ……」

俺は自分の足元を見下ろして嘆息した。裸足のままの足が、冷そうに土を踏んでいた。せめて靴下くらいはいて寝りゃ良かったと思うが、どうしようもない。

俺は小石や木の枝を踏まないように注意しつつ、軽く辺りを散策してみる事にした。

「木と草と石しかないな」

俺の正直な感想は、答える者がいないまま森の奥へと消えた。

屋久杉すら子供扱いするような、馬鹿でっかい樹木。こいつは恐らく年代物だろう。

色鮮やかな草花や、毒々しい茸。それらに群がる謎の小さな甲殻

虫。
聞いた事のないような声で叫ぶように鳴く鳥。あれは怪鳥の類だろうか。
時折聞こえてくる、獣の遠吠えのような声も不気味さに拍車をかける。
最初は富士の樹海か、もしくは国内のどこかの秘境かと思ったが、歩けば歩くほど、ここが日本ではない事が現実味を増していった。俺の知識が正しければ、日本にはあんな巨大な樹木はないし、それ以外にも見た事も聞いた事もない動植物ばかり目にする事も不自然極まりない。
歩き続けて現実を見る度に、嫌な予感が膨れていく。
――ここが国内じゃなくても、せめてどこか中南米辺りの国外であってくれ。祈るようにそう思ったが、その願いはあっさりと打ち砕かれる事となる。
そう、まさにこの瞬間から。

「グゴァアアアアアアアアアアアアアッ！！」

地を震わせるような叫び声と共に、何の予告もなく俺の目の前に異形の生き物が姿を表した。

# 第2話

木々がわずかに途切れ、開けた視界の先に久々に空が映る。
そこは日当たりの良い小さな広場だった。
うららかな日差しの中、俺の視線は眼前へと固定される。
それは、豚とも猪ともつかぬ異形の動物の背中。
いや、果たしてそれを動物と呼称していいのだろうか。豚や猪を見るのは初めてではないが、これは何か根本的に違う気がする。大きく隆起した筋肉に、離れている自分の場所にまで臭ってくる野性味溢れる獣臭。硬そうな体毛に覆われた大柄な体は、明らかに人のそれとは違う事が見て取れる。
外見に関して色々と言いたい事はあるが、一番重要な事はこれだ。
――何故にこいつは当たり前のように二足歩行をしているのだ？
確かに、動物は稀にその足で立ち上がる事はあるし、少しならば歩く事もある。だがそれはあくまでも手を広げて威嚇のためが大半であり、普通の動物はその足を全て地面に付けているはずだ。つまりは一時的な出来事。
こいつのように二本の足で堂々と立ち上がり、あまつさえ手に丸太――これは俗に言う棍棒だろうか――らしき物を持ったりもしない。歩き回り、人様のように道具まで使うとなるとこれは豚や猪の領域を超えている。チンパンジーやゴリラじゃあるまいし、悪い冗談だ。
ちらっと見えるその横顔からは、特徴的な豚鼻が確認できる。どうやら興奮しているらしく、息も荒いようだ。
穏やかな陽気と相反するその光景に、息が詰まりそうになる。何が何だか分からない。
ここで俺の脳裏に、ふとある単語が過ぎった。
――オーク――。
ゲーム等でよく見かける、割とポピュラーな敵モンスターの名前

だ。毛むくじゃらの体で、顔は豚と猪を混ぜたような感じ。二本の足で歩き、ゲーム序盤の森の中辺りでよくエンカウントする。人の姿を真似て簡単な武器や防具を装備している事もある。知能は低く、大抵は人語は解さない。雑魚キャラだが攻撃力はそこそこ高く、油断するとうっかりやられたりする事も多い。経験値は大体五十くらいだ。

「なるほどなー。これが噂のオークか。初めて見た」

目が覚めて気付けば森の中で、ちょっと歩けば今度はオークに遭遇。

つまりここは、どこぞのファンタジー世界というやつか。よくある異世界とか異次元とかそんな感じの世界か。剣と魔法で万歳ですか、おい。

薄々はそんな予感もしていたが、理性がそれをすぐに認めるのを拒否していた。だが、目の前でこんなものを見せられては納得するしかない。

オークが人を襲おうとする場面を見せられては。

……って、人？

オークは、今まさにその手に握り締めた棍棒を振り上げ、足元にうずくまる人目掛けて振り下ろそうとしていた所だった。

フードを目深にかぶっているため老若男女判断は付かないが、襲われているのは人間であるのは間違いないだろう。怯えているのかそれとも怪我をしているのか、その人物は硬直したまま動く気配が無い。

――不味い、このままではあの人は殺されてしまう。

どうする？　一体どうすればいい？

見知らぬ土地の見ず知らずの相手とは言え、いきなり目の前で人死にが出るとさすがに寝覚めが悪い。

それならばッ！

ここで俺がかっこよく颯爽とオークの前に現れ、一撃の下に打ち倒す。

……無理だ。

理由は単純明快。俺にはそんな力がないからだ。

見た目は一般人、だがその実態は……！？　みたいな漫画的展開はない。幼い頃から武道をしていたとか、実は喧嘩自慢という設定もない。もちろん超能力及びそれに順ずる力も無い。見た目も一般人なら、中身も一般人。更に最近家に篭もり気味だったので、どちらかと言えば身体能力は平均以下かもしれない。

という訳で、直接助けに行くのは無理無茶無謀の三段活用だ。

ならせめて石でも投げて、オークの気を逸らしてみるか。上手く行けば、フードの人も助かるだろう。俺は石を投擲した瞬間、ダッシュで逃げればいい。

四足歩行ならいざ知らず、あのオークは二速歩行。力はそこそこ強いかも知れないが、動きは鈍重そうだ。恐らくなりふり構わず走れば逃げ切れるだろう。

もし、石を投げた後オークが反応しなくても、さすがにそこから先はどうなろうと知らん。

こちとら伝説の勇者でもなければ正義感の強すぎるゲームの主人公でもない、ただの貧弱な一般人である。己の命を賭けてまで怪物とガチンコバトルする気はさらさら無い。

とりあえず俺は急いで足元から手頃な拳大の石を探して掴むと、大きく振りかぶった。

高く足を上げた、ややスリークォーター気味のオーバースロー。ゆったりとしたフォームから左腕を引き、腰を中心に身体の軸を半回転し、弓のようにしなった右肘を前に押し出すようにして投げる。加速する円運動。重心の移動は後ろから前へ。勢いは足の爪先からやがて右手の指先へと伝わり、やがて握り締めた石は放たれる。

「オラァッ！」

俺の豪快なフォームから繰り出された球、もとい石は勢いよく飛んでいく。渾身のストレート。
草野球で慣らした俺の投球術は、例えるならばランディ・ジョンソン。ペナントで二桁勝利は確実だ。今年の新人王は貰ったぜ。
時間にすれば一秒にも満たないだろう。風を切って真っ直ぐに飛んだ石は、割といい音を響かせて見事に着弾した。
……フードの人物の頭に。

「あらぴゃッ！？」

珍妙な悲鳴を上げて、フードの人がオークの前から吹き飛んだ。

「……しまった」

ストライクを狙ったつもりが、どうやら死球のようだ。しかも危険球退場確実。
オークは何が起きたのか分からず、呆然としている。
一応、オークの気を引く事には成功したようだ。結果オーライ……な訳はない。確かにオークの動きは止まったが、逃がすはずだったフードの人はうつぶせのまま痙攣して動かない。
こうなっては仕方ない。

「南無三」

すまん、許してくれフードの人。
俺はその場を離れようと、そっとその場を後ずさった。
俺とオークまでは、距離にしておよそ六、七メートル。音を立てないようにまずはゆっくりと距離を取ってから、当初の予定通りダッシュで逃げるしかない。

と、その時。パキりと足元から嫌な音がした。
破滅の足音とでも言えばいいのだろうか。まさに、最悪の音だった。
視線を下に向けると、素足の下には真っ二つに折れた枯れ木。
「あ……」
何というお約束。こんなフラグは欲しくなかった。
怪訝な顔をしたオークがこちらへと振り向く。こっそりと逃げ出そうとしていた俺と視線が交錯した。
何とも言えない気不味い空気が流れる。
しばらく、辺りを沈黙が支配した。

# 第3話

「……あ、どうも」

ヘタれた根性のせいか、それとも小心な日本人の特性か。気不味い沈黙に耐え切れず、俺の口からはとっさにそんな言葉が漏れた。

街中で皆が当たり前のように使う挨拶の言葉。こんにちは、よりも使い勝手のいい便利な一言。

それがどうもである。

昔から挨拶は時の氏神とも言われている。人間関係はすべからく挨拶から始まると言っても過言ではないだろう。

だが、一体オークに挨拶してどうなるというのか。

それは俺にも分からない。

「グゥオオオオオオッ！」

俺の挨拶に呼応するかの様に、オークが雄叫びを上げた。内臓に響く程の巨大な声に思わず身震いしてしまう。

もしや異文化コミュニケーション成立か？

……そんなはずはなかった。

ギラギラとした血走ったオークの双眸が俺を捉えている。獲物を仕留めるのを邪魔されたとでも思っているのだろうか、ひどくご立腹な様子だ。

握り締めた棍棒を振り上げ、巨体を揺らしつつこちらへと向かってくる。

今度のターゲットは俺へと即座に変更された模様。

純粋な野生の殺気に当てられ、俺はその場から動く事ができない。

体が言う事をきかない。動け動けと脳から命令は伝達されいるはずなのに、俺の足は地に根付いた様に動かない。

きっと、数秒後に俺はあの棍棒によって殴り殺される。
簡単に想像がつく。
立ち竦んだまま動けない俺の顔面に、あいつは棍棒を無慈悲に振り下ろすはずだ。
きっと即死だろう。
その姿は、例えるのならば潰れたザクロみたいな感じで。血飛沫という名の汁を撒き散らし、俺の顔面は飛び散って地面に真っ赤な花を咲かせる。
ジ・エンドだ。日ノ本秋彦、二十二歳と三ヶ月の人生の幕は異世界にて閉じる。
誰に看取られる事もなく、誰に知られる事も無く、どことも知れぬ異世界にて終焉を迎える。
――嫌だ。それは嫌だ。
確かに、もう死んでもいいかと自暴自棄になった事はある。
胸の中は未だ空っぽのまま。
それでも、大していいこともなかった人生でも、まだ死ぬのはご免だ。
死にたくない。死ぬのだけは嫌だ。そう思うと、俺の体にようやく変化が訪れた。
ピクりとも動かなかった足が震えてくる。
遅れてやってきた恐怖とでも言えばいいのか。認識が現実に追いついたのか。どちらでもいい。
とにかく逃げなくては。
動け、動け。動け俺の足！
震えの止まらない己の足を叱咤する様に、太腿に拳を思いきり叩きつける。
「痛ぇ……！」
鈍い痛みと共に、体の感覚が戻ってきた。

オークはもう、すぐ目の前にいる。牙が生え並ぶ、大きな口。その奥からは凄まじい臭気が漂ってくる。一体普段何を食えばそんな臭いになるのか。
そう思うと、何とは無しに俺自身がオークに食われる場面を想像をしてしまった。嫌な想像にも程があるが、食われると言う未来を否定できない。やつの食事になるのだけはご免こうむりたい。
だが、このままでは殺される。オークは今まさにその手に持った棍棒を振り下ろそうと、俺を狙っている。

「うわ、やばッ！？」

俺はとっさに地を蹴ると真横に飛んだ。
そのまま転がるようにして距離を取りつつその場から離れる。
後ろではなく、横に飛んだのには意味がある。人は往々にして、縦の変化には対応しやすいが横の変化には対応し難いのだ。
ちなみに自衛隊でも、銃で撃たれた時はまず横に逃げろと教えられるらしい。
鈍い音と振動がした。
俺が先程まで突っ立っていた場所には、薄い土煙の中棍棒が振り下ろされていた。その下では頭一つ分程地面が抉れている。どんだけ馬鹿力なんだこいつは。

「グゴォォオオオオオオッ！！」

オークが怒りに吠える。呆けている暇は無い。
再び棍棒が振り上げられる。俺は慌てて立ち上がると、オークの方を向いたまま後ずさった。
少し移動する度に背が樹木に当たる。気を付けないと、木の根に足を取られて転ぶ事も有り得る。俺は全神経を足と背に向け、微妙に方向修正しつつまた後ずさる。

すぐにでも背を向けて森の奥へと走り出してしまいたい。だが、恐らく背を向ければ、わずかなその隙に俺の頭は吹き飛ぶだろう。もしオークの手が届かないとしても、逃げた背に棍棒を投げつけられたら同じだ。

抉れた地面を見る限り、足は遅くともその馬鹿力からあいつは腕を振る速さだけは俊敏なようだ。

じりじりと距離を詰めてくるオークに、俺はゆっくり後退する事しかできなかった。

立ち止まれば殺される。だが、動いても逃げ切れない。このままではジリ貧だ。何か一発逆転の手がなければ、いずれ殺されてしまうのは間違いない。

自分の体中に嫌な汗が流れているのが分かる。

畜生、こんな事ならせめてもうちょっと体鍛えておけば良かった。昔部活動で剣道でもやっていれば少しは対抗できたかもしれない。今更後悔しても後の祭りだ。

――何か、何か手はないのか？

こういう時、漫画とかゲームなら特殊能力に目覚めたり助けが入ったりするはずなのに。よくあるパターンだと、異世界に来た瞬間怪力に目覚めたり伝説の魔法使ったりしてるのに。異世界みたいな馬鹿げた場所にいる癖に、何でお約束のイベントがないのだ。何で俺にだけこんな死亡フラグなんだ。これは差別だ。えこ贔屓だ。責任者出て来い馬鹿野郎。

内心で毒付くも、現状は何も変わらない。

俺の焦りを悟ったのか、オークの顔に下卑た笑みが浮かんだ。半畜生の分際で感情表現豊かなやつだ。

その、獲物に対しての圧倒的な余裕とも言える表情に、俺はカチンと来た。

理不尽だ。納得できない。何故俺がこんな目に合わねばならんのだ？　俺が一体何をした？

女にはフラれ、仕事はなくなり、いきなりこんな変な世界に放り出

された上に殺される？
――ふざけるな。
激しい怒りが心の奥底から迸ってくる。
現状、何の手もないのだ。このまま時間稼ぎするにも限界がある。
死にたくない。死にたくないが、どうしようもない。どうしようもないのならせめて殺される前に、一矢報いてから死んでやる。窮鼠猫を何とやらだ。人間様を舐めるなよこの野郎。
普段は温厚だと自負する俺だが、こんな状況なら話は別だ。もうどうにでもなれ。半ばヤケクソに近い感情だったが、俺はその思いに身を任せる事にした。
人間、開き直ると感覚が麻痺をする。恐怖感はいつの間にか消え、果てしない怒りだけが体中に漲っていた。きっと今、俺の脳内では凄い勢いでアドレナリンが分泌されている事だろう。
さっきまでは死にたくないとか、こいつとガチンコバトルするのだけは嫌だとかあれ程思っていたのに、今度は刺し違えてでも一矢報いたいと考えている自分。自分の心の中ながら、ままならないもんだ。
俺は後退するのを止め、オークの目をじっと見据えた。
「ガ……？」
不思議そうな顔をしてオークも立ち止まる。
「はいだらぁあああああッ！」
俺の魂を込めた裂帛の叫びが、森中に木霊した。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0537e/

異邦と楽園

2010年12月4日05時19分発行